

第12回 2022沖縄シンポジウム 沖縄とともに
— 慰霊の日を迎えて—

人権擁護委員会 沖縄問題対策部会 委員 寺崎 昭義 (24期)

1 はじめに

沖縄住民約9万4000人とほぼ同数の日本兵の犠牲を出したといわれている第2次大戦末期の沖縄戦は、1945(昭和20)年6月23日、日本軍の組織的戦闘が終了したとされている。

沖縄県は、この日を「慰霊の日」と定めて、糸満市摩文仁の平和祈念公園で、沖縄全戦没者追悼式を行っている。

また、本年5月15日、沖縄は、「復帰の日」50年を迎えた。

数か月にわたる沖縄住民を巻きこんだ地上戦、「鉄の暴風」といわれた米軍の砲爆撃などで、当時の沖縄県民の2割以上の民間人が犠牲となった。

今でも県民投票に示された県民の意思に反して、新たな基地建設が強行されている。沖縄では、戦後は終わっていない。

2022(令和4)年6月25日、標記のシンポジウムが開催された。このシンポジウムは、沖縄県の「慰霊の日」にあたって、戦後77年を経過しようとしている今、戦争の記憶を風化させないこと、多くの住民が戦闘に巻き込まれ犠牲となった沖縄の歴史を忘れないこと、をテーマにしたものである。

本年は、Zoomウェビナーで開催された。

2 第1部 沖縄戦の記憶と教訓

第1部は、石原昌家沖縄国際大学名誉教授が、沖縄戦の記憶と教訓の講演を行った。

石原氏は、沖縄戦で記憶すべき最も重要なこととして、(1)陸海軍を統帥する最高指揮権は天皇にあったこと、(2)牛島第32軍司令官の「住民が軍とともに戦うための戦場動員」を掲げた訓示、軍官民共生共死の指示方針、(3)1945(昭和20)年2月の近衛文麿の「降伏」の上奏を天皇が拒否したことなどを語り、更に、米軍の掃討戦を長引かす持久作戦、徹底抗戦の作戦、同年4月7日の「沖縄語ヲ以テ談話スル者間諜ミナシ処分ス」との沖縄語禁止を住民犠牲の元凶

として指摘した。

石原氏の講演に対し、神谷延治部会員が、石原氏の著書「証言・沖縄戦 戦場の光景」などの沖縄戦における住民の体験記録の重要性等について質問をした。

3 第2部 沖縄と抑止力

第2部では、柳澤協二国際地政学研究所理事長が、沖縄と抑止力についての講演を行った。柳澤氏は、防衛庁運用局長、防衛研究所長、内閣官房副長官補(安全保障・危機管理担当)を歴任している。

柳澤氏の講演は、沖縄県民に対し米軍基地にともなう騒音、環境汚染、米軍人、軍属による事件、事故等による多大な被害を与えてまで、日本の安全保障や抑止力にとって沖縄の米軍基地は必要なのかとの観点からの「沖縄と抑止力」がテーマであった。

同氏は、アメリカの「戦略の変化」及び米海兵隊の役割や位置づけの変化に言及し、「辺野古が唯一」などと言って、辺野古基地に固執して建設強行する日本政府の「政策」を批判し、「抑止力」という言葉で思考停止を促すにはいけないと指摘した。

同氏の講演に対し、藤川元部会長が、日本政府が何故辺野古に固執するのか、尖閣有事、台湾有事、武力によらない日本の防衛などについて質問をした。

4 シンポジウムを終えて

参加者からは、「戦後70年以上が経過し、ともすると風化しかねない沖縄問題について、現在のウクライナ戦争や将来起こりうる台湾問題とも関連させながら、改めて考察の機会が得られた」、「時間を忘れるほど充実したシンポジウムでした」等の意見が寄せられた。

両氏の講演で、「国体護持」のため、沖縄戦で多大な犠牲を強いられた沖縄の人々の意思に反して、アメリカの軍事戦略の変更でいまや基地建設の必要性さえ疑問視される中、「抑止力」という言葉で思考停止し、「辺野古」に固執し基地建設を強行する政府の問題性が鮮明となった。